



2024
Annual
Report
年次報告書

Voice of friends




FRIENDS
WITHOUT A BORDER

(認定)特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-14-11 ヤマダビル6F
TEL/FAX:03-6661-7558 friends@fwab.jp www.fwab.jp



Photo credit / Adri Berger , Karl Grobl.com , Kenro Izu , Yumiko Izu

” 国境なき友人たち “

支援者の皆さまへ



今年にはラオス人の医療部長、医療教育部長、総務部長、看護部長と4人の病院運営の要となるリーダーが揃いました。彼ら、彼女ら部長に続く各部署のマネージャーも充実して近い将来のラオス人主導の病院誕生も視野に入ってきたのが嬉しい状況です。一方、開発部門（広報、資金確保）は未だ外国人スタッフに頼っていますがこれは文化の相違が理由に挙げられて難しい分野です。ラオスやカンボジアは熱心な仏教国で、『寄付』というところの人々は寺院へのお布施として捉え

ているようです。学校や病院といった施設の支援には『寄付』という行為に直結しないのが残念ですがこれも独特の文化でしょうが、今年開院25周年を迎えたカンボジアのアンコール小児病院では、カンボジア人主導の国内の広報・資金確保活動もこのような文化の障壁を乗り越えて運営資金の三分の一近くをカンボジア国内で集めるようになったのは嬉しいニュースでした。ラオスでも将来はこのような状況になることを願っています。

この1年半の間、ラオス政府と折衝し

てきたMOU（病院運営に関する覚え書きですが、政府の規約が変わって5年間の改定契約となったのはこれまでは10年契約）その手続きの煩雑さを経験するものとしては残念な結果です。また要請していた政府の金銭的支援も残念ながら得ることは難しいようです。ラオスの経済状況が苦しいようで、お隣の県立病院も元々少ない予算がさらにカットされるといふ話で、部署の削減の噂まで取り沙汰されています。25年前、私が全く同時期に訪れたカンボジアとラオスはお隣同士の国ですが、その政治形態の差ゆえに、発展の速度に大きな違いがあるのに驚かされます。経済の発展が遅い代わりにゆったりとした生活のラオスやラオス人の良さはありますが、病院という人命を預かる現場を見ているとその差が国の人々の将来を左右するのではないかと危惧を感じずにはられません。

ここ数年の極端な円安によって、日本でせっかくいただいたご寄付をドル建てでラオスに送金する段になると大きく目減りしてしまふのが非常に残念です。国の経済が日々の活動に影響していることはここでも同様のなを感じます。ラオ・フレンズ小児病院はフレンズUSAとの共同プロジェクトなので、助け合いで辛い危機的な状況に陥ることは免れています

我々フレンズJAPAN一同さらなる募金活動を行う予定ですので、これまでご支援いただいた皆さまにもご理解いただきたく願っています。

カンボジアのアンコール小児病院で行ってきた「地域医療支援・保健教育プログラム（CBHEP）」は、ラオ・フレンズ小児病院では「予防プロジェクト」として2023年にスタートしました。僻地農村部の家族の保健教育や予防医学のプログラムを地域の保健センターと連携して行い、妊婦さんの健康や子どもたちの健全な発育に貢献する重要なプロジェクトです。妊娠してから最初の1000日間で、生まれてくる子どもの健全な成長に大きな影響を及ぼすと言われています。医療・教育・予防はフレンズの病院の3本の柱です。その3本が今年揃って活動できるようになったのはラオ・フレンズ小児病院にとって待ち望んだ時でした。これも皆さまの変わらぬご支援のおかげと深く感謝いたします。



フレンズ・ウイズアウト・ア・ボーダー
創設者 井津建郎

2024年は、ラオス政府とフレンズ・ウイズアウト・ア・ボーダーとの間で交わしたMOU（病院運営に関する覚え書き）の更新がスムーズに進まないというチャレンジからのスタートでした。更新されない状態でも活動自体の継続は許可され通常通りでしたが、更新手続きに必要な障壁を一つずつ根気よく解決し続けた1年となりました。結局、年内での更新はかなわなかったものの、2025年春頃には締結できる見込みです。そういう意味では病院は医療従事者だけでは運営できないことをスタッフが実感する年にもなりました。MOUの調印は、ラオス国内で活動をする上では欠かせない手続きとなります。2025年2月、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）が開院して10周年の記念すべき日を迎えることができましたが、今日まで診療を続けられたのは、この政府との覚え書きがあったからです。時間がかりましたが、十分ラオス政府から吟味され承認された活動であることをとても誇りに思います。

こうした事務的手続きの傍ら、院内では医療の改善を追求し、日々奮闘していました。昨年の特記すべきことの一つは、長期通院が必要な患者さんに同じ医師が毎回診察をする専門外来の充実です。開院当初、一日の来院数は十

数名でしたが、現在では1000、150名となりました。その中には、長期的、かつ定期的に診察が必要な疾患を持つ子どもたちがいますので、疾患ごとに外来を振り分け、同じ医師が診察することで、患者さんの経過と生活環境を含めた情報をより把握できる、情報が分散しない、患者さんの待ち時間も最小限にできるなど多くの利点があります。2017年からスタートしていた2つの専門外来（障がい児クリニック、サラセミアクリニック）に加えて、さらに、てんかん、腎疾患、骨疾患のクリニックを新たにスタートさせ、順調に運営されています。

1年ごとに色を付けるとしたら、開院時は真っ白でした。徐々に色が染まり、濃厚な色になってきているなと感じます。日々の歩みは積み重なり、成長へ繋がっていたと思うと感慨深い気持ちです。2025年はどんな成長があるか、今から楽しみです。引き続き、温かく見守っていただきたいと思います。



フレンズ・ウイズアウト・ア・ボーダー JAPAN
代表 赤尾和美

私たちは「医療」「教育」「予防」を活動の柱としています



国際基準に見合った、質の高い病院を

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPANN は団体創設以来、適切な医療を受けることが困難なアジアの子どもたちのために活動しています。

ラオスとカンボジアに非営利の小児病院を設立し、24時間体制で診療を実施。私たちの目指す小児病院は、「国際基準に見合った、質の高い、心のこもった医療を提供できる病院」です。

病院の外にも目を向ける、

生活環境から考える医療

私たちの活動は病院内にとどまりません。経過観察が必要な慢性疾患患者をフォローアップする訪問看護や、保健・衛生観念が浸透していない農村部に向いて病気の予防活動も行います。遠方の地域に赴くことで見えてくるもの、医療の必要性に気づいていない人に教育すること、防げることがあるからです。

病院の現地化に向けて、私たちができること

私たちの目標は「現地の人の手で運営できる病院」です。いつまでも支援されるのではなく、自分たちで歩んでいける病院へ。そのためのスタッフ教育も、重要な取り組みの一つです。たとえば、病院の公用語を英語にすることで、世界中の指導者や書物から高度な技術を直接学んだり、自らが学会に参加したり、発信者となって世界に支援を呼びかけたりできるようにしています。

アンコール小児病院（AHC）はすでに現地化を達成しました。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）もまた、現地化を視野に入れながら、経験豊富な外国人スタッフやボランティアが日々、現地スタッフの育成に力を注いでいます。

Compassionate care

～小さな命に寄り添う医療～

すべてのことに思いやりの心を持って対応すること
どんな患者さんも我が子を思うのと同じように接すること
それが私たちの考えるCompassionate careです
子どもたちに対する医療行為においてのみならず
当団体に関わるすべての活動は
Compassionate careの信条に基づいて取り組まれています

ラオ・フレンズ小児病院 （LFHC）

2015年2月、ルアンパバーン県立病院敷地内に設立しました。現在、最も力を入れているのが、このプロジェクトです。ラオスでは肺炎

や下痢、栄養失調等、予防や治療のできる病気で亡くなるケースが珍しくありません。子どもの病気がわかっていても、貧しさゆえに治療しない選択をする親もいます。国の脆弱なインフラと山岳地形も、医療へのアクセスの妨げに。また、既存の病院や保健センターは、医療設



備の不足や、医療従事者の医療倫理と技術の不足などにより、十分な医療を提供できるとは言えません。ラオスが抱える「使われない医療」使えない医療」という実情を、少しでも改善したいと願っています。

アンコール小児病院（AHC）

1999年2月、私たちの最初のプロジェクトとして、シエムリアップに設立しました。当初は私たちが運営を担っていましたが、目標を達成し、2013年1月に現地化。現在は「カンボジア人の、カンボジア人による、カンボジア人のための病院」として、私たちが育てたスタッ

フが主体となって舵取りを行っています。また、カンボジア国内の小児医療をリードする存在に成長し、国の医療行政に関わるほか、国内他病院の医療従事者、医療系学生や保健衛生に携わる人たちにも研修を提供。国全体の医療レベル向上に貢献しています。予防活動も、農村部や小学校に向いての衛生教育を継続中です。

医療

この1年のスタッフの成長はめざましく、若手医師たちも院内で重要な役割を担えるようになりました。院長は、任期を終えたトーマス・ブルーン医師からロバート・ウィノカー医師に引き継がれ、新院長のもとスタッフが一丸となって、自立に向けた努力を続けています。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）は、経済的な制約なしに質の高い小児医療を提供する稀有な医療機関です。その意味や意義を理解した上で、すべてのスタッフが「Compassionate care」を徹底できるように取り組んでいます。

“Compassionate care”にまつわる大きなニュースがありました。患者さん家族のための宿泊棟が、新たにオープンしたことです。LFHCには、遠方からはるばるやって来る患者さんも少なくありません。片道何時間もかかったり、



場合によっては日をまたいだり。小児病院という性質上、患者さんは、保護者や兄弟などご家族と一緒に来院されます。これまでは、患者さんの治療が一段落するまで、同行のご家族は病院が貸与するテントを使用したり、待合所にゴザを敷いて寝泊まりするしかありませんでした。その状況を改善するため、同行のご家族が安心して快適に過ごせる宿泊棟が必要だったのです。これもLFHCならではの“Compassionate care”であると言えます。

外来病棟

LFHCへの信頼度が増したことや、別の県や地域からの紹介が増えていることで、患者数は年々増加傾向にあります。年間来院数は4万2000人を突破。ラオス国内での知名度・信頼度が上がっていることの証であり、喜ばしい反面、現場では問題も生じていました。診察までの待ち時間です。問題解消のため、外来病棟では患者さんの流れを合理化する改革に着手。トリアージ（重症度を見極めて診察の優先順位を決める）を見直すことで、患者さんの待ち時間短縮に成功しました。



入院病棟

患者数が前年度より約700人も増加。この状況にスタッフは大きなプレッシャーを感じずにはいられませんでした。改めて自分たちがやるべきことを確認し合い、献身的な医療チームを築いたことで、自信につながることができました。

まずは、感染予防管理の強化に着手。患者さんとスタッフ双方の安全確保に努めました。また、全人的なケアを目指して、患者さん家族への教育も開始。介護者が知識を持つことで子どもの回復をサポートできるように、病棟の負担軽減につながるからです。それはまた、新たな患者さんの受け入れを可能にするということでもあり、よい循環を促します。

こうした新たな取り組みにあたり、スタッフ間コミュニケーションの見直しなども行っており、質の高いケアを持続できるように努めました。

手術室

1046件の手術を行いました。手術件数の増加に伴い、手術症例も多様化してきています。整形外科、鼠

の看護師がICU専門トレーニングを受けることができました。

新生児病棟

この病棟でも患者さんが大幅に増加。需要の高まりに対応するため、専門家育成に重点を置くことになりました。新生児には繊細で特別なケアが求められ、専門の知識や技術が必要不可欠です。

新生児蘇生トレーニング、カンガルーマザーケア、新生児の痛みとストレスの管理、母乳育児支援、新生児と母親のスクリーニング（病気の早期発見と対処）など、新生児ケアのためのスタッフ研修を強化しました。



径ヘルニア、腹部手術を多く行っている一方、一部には高い専門性を必要とする症例、複雑な症例も。脾臓摘出手術、頭蓋摘出手術など、命を救う新しい手技にチャレンジできたことは大きな進歩でした。

それ以外に、先天性心疾患の心臓外科手術、火傷の痕跡修復など形成外科的手術、口蓋裂などの手術が、タイ、スイス、シンガポールなど海外医療チームの支援によって、タイやLFHC内で行われました。質の高い医療提供を可能にする海外の医療チームからの支援は、LFHCの大きな強みになってきています。

集中治療室（ICU）

これまでの重症病棟（HAU）を、集中治療室（ICU）と改名しました。LFHCは、ラオス北部で集中治療室を備えた唯一の小児病院です。この地域の希望の光とも言える病棟で、一貫して質の高いケアを提供しています。

海外からの医師や看護師などICUの専門家が現地スタッフとチームを組んで知識や技術の強化を図っており、17人の医師と、39人

救急病棟

コロナの影響で患者数が激減した2021年に比較すると、約倍数の患者さんを迎えています。ここでも患者数急増にあたっての対応策が求められ、様々な改革に着手しました。

まず、外来病棟との連携を強めることで、患者さんの流れを合理化することに成功。それに加え、毎朝の症例検討、臨床スキルやリーダーシップ能力向上研修などを実施し、LFHCの救急医療体制を強化しました。

検査科

新しい検査用キャビネット設置を含む検査室の改修が行われ、作業環境が大幅に改善されました。新検査機器導入により、検査の種類や質



も向上しています。特筆すべきは、国立HIVセンターと協力して、HIVPCR装置を設置したこと。検査・診断が迅速に行えるようになったことで、18か月以下の子の治療も早期に開始できるようになりました。

また、昨年に続きタイのマヒドン大学との提携も更新され、協力関係がより強固に。タイで開催された国際会議にも参加の機会を得ることができました。

放射線科／画像診断部

ポータブル超音波診断装置3台を新たに導入。この新装置によって



診断能力が高まっただけでなく、診察の現場での高解像度画像診断が可能になりました。

また、外部ボランティアのサポートを受け、X線検査や機器操作をはじめ放射線の扱いに関するトレーニングを実施したことで、チームの能力と自信がアップ。ハードとソフト両面が充実し、放射線科／画像診断部が飛躍した年になりました。

障がい児クリニック

障がい児クリニックでは、国際的な専門家による内部研修とサポートが実施されました。この専門外来はラオス北部ではLFHCにしかないため、周辺からの期待も大きく、常に質の高いケアが提供できるよう環境を整えています。

その一環として、スタッフ2人が日本で専門の研修を受講しました。



他・専門クリニック

姿勢を保つことが困難な子どもをサポートするための装具製作に焦点を当てた研修で、帰国後、このスキルは現場に大いに活かされています。

腎疾患クリニック83人、てんかんクリニック68人、サラセミアクリニック615人の患者さんが登録し、治療を受けました。

専門治療の拡大は、ラオスの医療体制を向上させる上で避けては通れません。また、患者数の増加からも高いニーズがあると判断でき、今後もより良い治療環境の整備が求められています。



数字で見るラオ・フレンズ小児病院（LFHC）

年間患者数

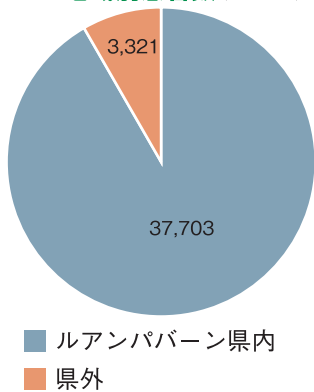
外来患者数	：21,968人
入院患者数	：2,972人
新生児患者数	：577人
救急患者数	：18,343人
手術件数	：1,215件

※のべ数

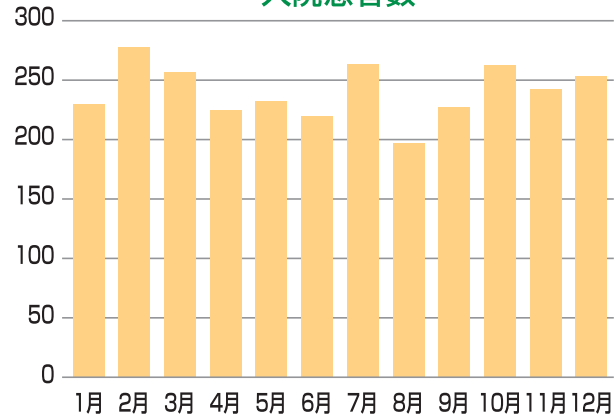
よくある疾患TOP5

- ①ウイルス性上気道感染症
- ②サラセミア
- ③ウイルス感染症
- ④ウイルス性胃腸炎
- ⑤急性胃腸炎

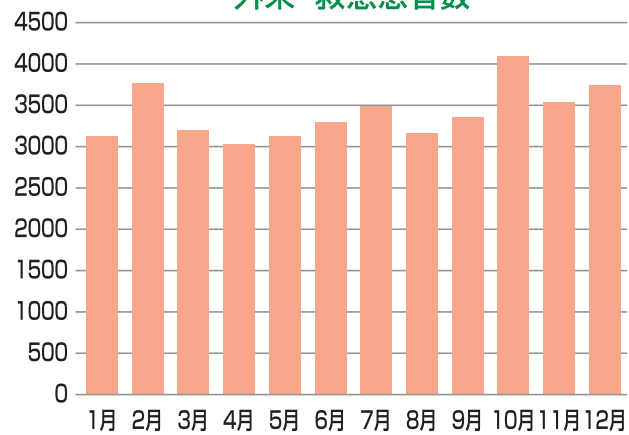
地域別患者数（のべ人数）



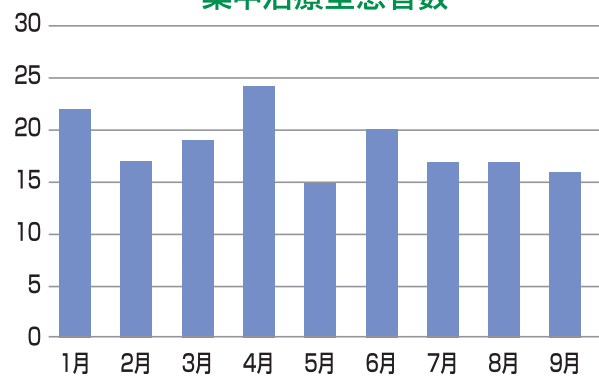
入院患者数



外来・救急患者数



集中治療室患者数



教育

教育は、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の要のひとつ。知識と技能を向上させることはLFHCの発展に欠かせないものであり、ひいてはラオス全体の医療の底上げにつながるかと考えているからです。LFHCの教育は、医療スタッフ、非医療スタッフを問わず、また院外医療従事者に向けても、多面的なアプローチで提供されています。たとえば、LFHCの朝は、スタッフのモーニングティーチングから始まります。様々な症例に関し新しい検査や薬について学ぶなど、各部署が持ち回りでプレゼンテーションをしディスカッションする時間は、LFHCに欠かせない日課のひとつです。研究手法のワークシヨップも行われ、各自が自ら学ぶを深めることができるようサポートしています。

医師教育

主要な小児科専門分野を網羅した1年間の基礎コースを設置し、若手医師や研修医のための基盤作りを重点を置きました。専門能力を養うためには教育を継続させることが必須であり、毎月、異なるテーマを設けて、シニアドクターによる学習会も実施しています。さらに、臨床と非臨床の両面のスキルを向上させるためのコミュニケーショントレーニングや、看護師と連携したICUトレーニングなどを取り入れた2年間の教育カリキュラムを確立しました。

看護師教育

国内他病院との協力関係強化も、教育環境の向上につながっています。それぞれが症例報告を行うなど、共に学び合う機会が増えしました。また、海外の医療支援団体によるオンライン会議が毎月開催され、教育の幅が広がっています。



きるスキルを学ぶプログラムなど、看護師の多くがレベルごとの研修に参加しました。基礎から上級までいくつものプログラムが用意されており、上級者になると、リーダーシップやマネジメントに関わるトレーニングも受講しています。

モーニングティーチングでは医師だけでなく看護師も積極的に発言する環境が作られ、必然的に専門知識を深める学びが必要になりました。それらもまた、学習意欲を刺激する要因のひとつとなっています。

郡立病院サポート

ルアンババーン県内の郡立病院に対し、LFHCは支援プログラムを作成して継続支援を行っています。郡立病院の多くが様々な問題を抱え国の医療を停滞させている、という現状があるためです。院内のインフラや医療用品の不備、訓練が不十分な職員など、病院として課題があるだけではなく、多様な民族で構成される社会事情もまた、問題を複雑にしています。

支援プログラムは、質の高い新生児ケアと、下痢や肺炎など症例の多



い病気に対する効果的な治療を重視したものです。いくつかの郡を選び少しずつサポートを始めていますが、最終的には全ての郡でトレーニングを提供できるよう計画的に実施しています。トレーニングと評価を繰り返した結果、参加したすべての病院で改善が認められ、参加者からは支援プログラムの継続を望む声が多く寄せられました。

医療学生への教育

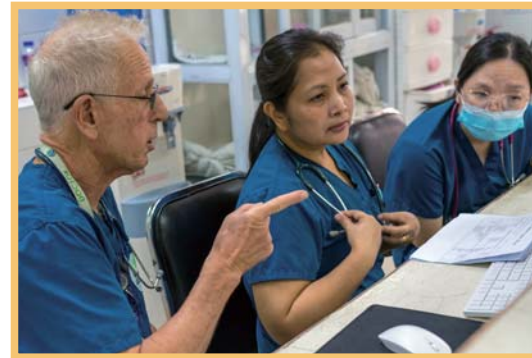
LFHCは地域の医療者養成学校とパートナーシップを結び、実践的な医学教育の拠点として研修医やインターン、看護学生、助産師学生、医療助手学生を受け入れています。医師やその他の臨床スタッフが実際の医療現場で学生を指導。将来的にラオスの医療を担う人材を育成しています。

I M A M

（急性栄養失調の統合管理） 研修プログラム

LFHCは2023年に、ラオス保健省より「栄養不良管理および治

療】を行う優れた機関として認定されました。また、ユニセフラオスからは「栄養不良ガイドラインの実施機関」に選定されています。この分野においては2024年も引き続き、LFHCが国内でインシアチブを取る形で研修を進めてきました。研修に参加しているいくつかの県立病院を訪問し、取り組みの実施状況調査や評価を行うことで改善点をあぶり出します。そこでの考察をまた次の課題へとつなげ、研修の継続へ。このアプローチがラオスのスタンダードとなりつつあると、実感できた1年でした。



予防

昨年度から始まった『予防プロジェクト』は最初の1年を無事に終え、大きな成果を得ることができました。

『予防プロジェクト』とは、子どもの健やかな成育には妊娠時から2歳の誕生日までの1000日間が重要な鍵となる、ということに着目した取り組みです。予算は病院運営全予算の3%しかなく、全体から見れば小さなプロジェクトですが、その成果はとても価値のあるものとなりました。活動成果は以下の通りです。

● **キャパシティビルディング・健康教育による受益者**
74村のヘルスワーカー、24カ所の保健センターと郡医療スタッフ。

● **コミュニティへのインパクト**
37村の約3000世帯へ質の高い栄養について教育を提供。

● **子どもの身体計測モニターリング**
約900人の2歳以下の子どもた

ちの身体計測を実施し、6人の重症急性栄養失調(SAM)と75人の中度急性栄養失調(MAM)を発見。

● **栄養失調の子どもの経過**
栄養失調(SAMとMAM)と診断された全ての子どもたちへは適切な介入がなされ、栄養状態は80%改善された。

● **ヘルスプロモーション**
広域にわたるヘルスプロモーションによって、その他の栄養失調(ビタミンB1欠乏症)、下痢、火傷などへの予防効果もあがった。
個々の患者さんに対する『アウトリーチプログラム』は、引き続き退院のサポートや退院後のフォローアップを行いました。2024年の活動実績は次の通りです。

● **訪問看護**
訪問数…651件
訪問走行距離…46,255km
合計訪問患者数…227名
● **ソーシャル・社会心理サポート**
健康教育…1269回(服薬、衛生、栄養など)
家族カウンセリング・ミーティング…

738回(病状説明、ケア計画、苦情対応など)
経済アセスメント…367件
訪問看護前アセスメント…91件(家庭・住環境、交通状況やその他のニーズ抽出)
電話によるアセスメントとサポート…1132件(病状確認、予約確認、来院に関する問題など)

訪問看護ではゴール設定をし、それが達成できた時を訪問終了の判断としています。たとえば、処方通りの服薬ができない子ができるようになる、食事が十分にとれず栄養失調を引き起こしていた子が栄養を摂取できる状態になる、など。ゴールを達成するまでの期間が数か月の子もいれば、何年も達成できない子もいて、その期間は一定ではありません。中には5年以上関わっているケースも。
子どもの疾患や看護環境は、家族や生活の背景に影響されることが多々あり、その部分の解決は抗生物質で細菌を死滅させるより根深い問題であると感じます。

訪問看護を長く続けているMちゃんのケース

Mちゃんは、病院から車で2時間半の村に住んでいます。途中悪路もあり、アクセスが悪い地域です。Mちゃんは、郡病院で産まれた翌日に当院へ搬送されました。郡病院では破水後の難産により帝王切開に切り替えて出産をしましたが、仮死状態だったようです。脳への酸素不足が長引き、生後間もなくから痙攣が頻発していました。最初の入院は18日間で、その後は訪問看護でフォローアップを開始。現在まで約3年半の訪問を継続していますが、その間、年に数回ずつ計7回の入院経験があります。

Mちゃんは痙攣と脳障害によりうまく母乳を吸うことができず栄養失調になっていましたが、家族は農作業のため1日不在となり、ケアする人もいません。私たちは、痙攣の管理と栄養状態の改善、日常のケアをしてくれる人の確保を、主なゴールに設定しました。

入院中に何度も食べる練習をしましたがどうしても自力で咀嚼・嚥下することができないため、自宅に戻っても鼻からの管で栄養を注入する方法を取ることを決断しました。電気もなくきれいな水もない村で鼻からのチューブの管理をするとは、容易なことではありません。チューブは定期交換が必要で、最寄りの医療施設までは徒歩2時間半。それだけでも大変な上、厳しい貧困と家族の識字の問題もまた、自宅介護の大きな障壁となりました。

訪問看護では退院後に考えられる問題を抽出し、退院への準備を進めます。家族へは、流動食の作り方、安全な注入の仕方、チューブの交換方法、服薬の指導を念入りに行いました。けれども情報が多く覚えられませし、お母さんは明らかに「もう嫌だ」という表情をしています。「生懸命奮起させ、どうにか退院にこぎつけましたが、退院1週間後に訪問

をして大ショック。鼻からのチューブは抜かれており体重減少、服薬もしていなかった様子です。
このような状況が何度となく繰り返されました。訪問の合間の期間中に実際の状況がわからないことが大きな問題だったため村長さんを変えた話し合いをしたり、電気を通すためにメンテナンススタッフが同行したり、訪問頻度を増やしたり、試行錯誤の数年間でした。

ところがこの1年ほどで、少しの変化が見られるようになりました。お母さんから連絡をくれるようになったのです。「Mちゃんが痩せてきた」「Mちゃんの様子がいづとも違う」「Mちゃんの熱が下がらない」と、自ら電話をしてきます。病院へ来るための交通費がないので、診察が必要な時は訪問看護の車で送迎することにしました。素晴らしいポジティブ変化だと、アウトリーチスタッフは大喜びです。

こうした家族の変化はいつ見られ

るかわかりません。結果がすぐに出不いことで諦めてしまつては、いつか見られる変化は永遠に見ることができないでしょう。だから「Don't give up!」が私たちのモットーです。「一人も取り残さない社会を目標に、全力で臨みます!」



▲時計が読めない人々には、このようにして服薬指導



◀ラオス農村部の家屋



ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）だより

Vilaykoneviyakone
（通称プイ）が総務部長アシスタントに
昇進しました

病院は医療スタッフのみで成り立っているわけではありません。事務系スタッフをはじめ、様々な非医療スタッフが働いています。プイは、LFHC開院前から設立に向けて共に動き出した、ラオス人初期メンバーの一人。総務スタッフとしてLFHCの土台を支え、このたびの昇進となりました。

プイの専門は、財務、経営、マーケティング。ルアンパバーンの技術専門学校で会計秘書を学んだ後、経済金融専門学校で金融の学士号を取得。英語力向上のために教員養成大学の3年コースも修了しました。卒業後はホテルの副支配人として働いていましたが、「重要な使命を持ち、個人的に成長できる職場」を求め、LFHCへの転職を決めたそうです。ラオスで初となるシステム導入に携わったり、病院運営の戦略を立てたり、政府との連携を取ったりと、LFHCで大きな役割を担っているプイの仕事に対する熱意は、他スタッフの見本にもなっています。



タイのサポートチームと連携し 心臓外科手術が実現しました

LFHCでは開院以来、心臓に問題を抱える多くの子どもたちを診てきました。心臓超音波検査（心エコー検査）を学び技術を習得した医師はいるものの、心臓専門医ではなく、今はまだ院内で手術ができる環境ではありません。しかし、いずれ手術の機会が訪れた時のために、心臓手術を必要とする子どもたちのリストを作成し、アウトリーチチームが患者さんとその家族のサポートを担う体制をとっていました。

手段を模索する中、LFHCのマネジメントチームが、「心臓外科医、心臓専門医、看護師、サポートスタッフで構成されるタイの心臓専門チームがラオスで医療支援を行う予定」という情報をキャッチ。すぐにチームと連絡を取り合い、対象の患者さんを紹介できるように準備を整えていきました。LFHCの医師陣はまず、リストの中から20人の候補を選出し、ラオスの首都ビエンチャンにあるマホソット病院で、診察を含め必要なアセスメントを受診してもらいました。その結果、12人が手術の対象者に。手術はタイのバンコクにあるKasemrad病院で行われます。

タイでの心臓手術第1号は、1歳のオリビアちゃん。ASD（心房中隔欠損）と呼ばれる、心臓に穴が開いている患者さんです。ASDは、成長不良や体

病院の壁が明るく華やかに！ 日本人アーティストのルルさんが ペインティング

はじめは、LFHCに勤務する赤尾に届いた1通のメールでした。送り主は、河野ルルさん。世界を飛び回り、訪れた国々で壁画をチャリティで描いているとのこと。

（参考 <https://lulkoono.studio.site/>）

ルルさんはルアンパバーン在住の日本人の方から赤尾の話聞き、「LFHCの壁に絵を描かせてもらえませんか？」と、相談を持ちかけてこられたのでした。LFHCでは、子どもたちの病院に対する恐怖心をやわらげたい、安心してほしい、という気持ちから、病棟や廊下の壁面に明るく楽しい絵を描いたり飾ったりしています。ルルさんからの提案はLFHCにぴったりで、もちろん大歓迎！すぐに、病院の外壁に描いていただくことが決まりました。

ペインティング中は、ルルさんはもちろん、スタッフや患者さんも一緒に楽しくんでいたのが印象的でした。見た人をハッピーな気持ちにしてくれる壁画が完成し、子どもたちを笑顔にしています。



ラオスでは珍しい 障がい児クリニックが 評判を呼んでいます

LFHCの患者さんの中には、聴覚や言語に問題を抱える子どもたちが多くいます。原因は多岐に渡り、脳性麻痺、口蓋裂、ダウン症、自閉症、頭部外傷、日本脳炎などの感染症による後天性障がいなど様々です。原因不明の発達遅延、というケースもあります。LFHCでは障がい児クリニックを設け、チャイルドライフセラピストや言語病理学の専門家を交えて治療にあたっていますが、このような専門クリニックはラオスでは珍しい存在です。

オーストラリアからLFHCにボランティアの講師としてやって来たキャサリンさんは言語病理学者。LFHCの障がい児クリニックに接し、とても感銘を受けたそうです。スタッフが思いやりを持ち、地域の文化にも配慮したケアを行っていること。その支援を受けたいと思う人々が遠方からでも通うこと。

障がい児クリニックは、困難な病気と共に生きる子どもやそのご家族の力になる専門クリニックです。



世界で報じられた大型台風に LFHCも大きく揺さぶられました

2024年9月7日にラオスに上陸した台風（アジア名Yagi）は、ルアンパバーンにも大きな被害を及ぼしました。ラオス北部と中部では大雨と洪水が各地で発生し、約14万人が被災。この危機的状況の中、LFHCで最も大きな打撃を受けたのはアウトリーチチームでした。病院から遠く離れた村々で暮らす患者さんに、薬を届けなくてはならないからです。台風による道路の遮断、川の増水。さて、どうするか。

病気によっては、欠かしてはいけな薬を服薬している患者さんもあります。そこには絶対に届けようと、チームの面々は決意しました。川をかき分け、車では通れないぬかるんだ小道を進み、患者さんのもとへ。ひどい状況下に置かれながらも、強い信念と決意でミッションを遂行しました。

たとえ災害時であっても必要不可欠な医療サービスを止めない。LFHCの姿勢、スタッフの心意気を感じられるエピソードです。



SUPPORT



カンボジア支援

当団体が設立し2013年に現地化を果たした
アンコール小児病院(AHC)の2つのプロジェクトを、
継続して支援しています。

【教育プロジェクト】

アンコール小児病院(AHC)は、
今ではカンボジア国内の小児医療
をリードする立場になっています。
医師たちは各種学会やシンポジウ
ム、セミナーなどに積極的に参加し
ており、また、自分たちが主催者とな
る大きなシンポジウムも開催しま
した。シエムリアップのホテルを
会場として開かれた「AHC主催第
8回小児医療会議」には、全国から
257人が出席し、さらに300人
がオンライン参加。保健省国務長官
シエムリアップ州知事、カンボジア
国立医療審議会理事も出席する中
AHCの外科医が進行役を務め、
リーダーシップを発揮しました。

院内では、医師はもちろん全ス
タッフに向けた教育体制をさらに
強化するため、教育部長をコディ
ネーターとして11の委員会を設置。
教育部は保健省と協力し合いなが
ら、各委員会が責任を持って医療の

- AHCが受け入れた学生の人数
- 医療インターン 161人
- 看護学生 482人
- 助産学生 63人
- 歯科看護学生 36人
- 薬学生 7人

【地域保健医療プロジェクト】

- 質向上に取り組めるようサポートしています。
- 開院以来の目標のひとつ「カンボ
ジアの医療再建に尽力する」ために
続けているのが、国内医療学生の受
け入れです。中でも、コンポンチャ
ム地域保健トレーニングセンター
とのパートナーシップは重要な鍵
となっています。このセンターは、
医療専門家を目指す学生のための
教育施設です。これまでに約
2500人の看護学生をAHCで
受け入れているので、毎年1000
200人の学生がAHCで学んで
いることになりました。AHCで学ん
だ質の高い医療を、カンボジア国内
各地へと広げる担い手になってく
れることでしょう。
- 5932人の参加者に基礎衛生教
育を行いました。
- 3947人の村人に栄養教育を行
いました。
- 7381人の子どもに栄養不良の
スクリーニングを実施しました。
- 2612人の参加者に応急手当訓
練を行いました。
- 村や学校にAHCスタッフが向
き、保健指導や予防教育、栄養教育な
どを行うプロジェクトです。

外来患者総数： 112,387人
入院患者数： 7,114人
集中治療室患者数： 1,614人
外科手術件数(大小含む)： 16,047件
新生児患者数： 458人

※のべ数



©Angkor Hospital for Children



ラオスを知ろう！



ユニセフ 「世界子供白書2024」 より抜粋

	日 本	ラ オ ス	カンボジア
新生児死亡率	1人	20人	12人
5歳未満児死亡率	2人	40人	24人
妊産婦死亡率	4人	126人	218人
平均寿命	85歳	69歳	71歳
家庭で衛生的な飲用水源を利用している割合	99%	85%	71%
家庭で適切なトイレ設備を利用している割合	100%	79%	69%

※新生児および5歳未満児の死亡率は、出生数1,000人あたりの死亡数。
※妊産婦死亡率は、出生10万人あたりの死亡数で、当該時期に妊娠関連
の原因により死亡した事例が対象。

首都：ビエンチャン
面積：日本の約3分の2
地形：国土の約80%が
山岳地帯で海のない内陸国
人口：744.3万人
(2022年、ラオス統計局)
民族：ラオ族ほか50民族からなる
多民族国家
気候：熱帯モンスーン気候
(雨季5〜10月、乾季11〜4月)
政治体制：一党支配体制の社会主義国

ラオスとゾウ

タイ、カンボジア、ミャンマーな
ど東南アジアの国々では、象は特別
な存在です。人々の生活や文化、宗
教に深く関わり、神聖な動物として
崇拝の対象にもなっていました。ラ
オスも同様です。

現ラオスの前身で、14世紀から18
世紀まで存在したランサーン王国。
「ランサーン」には「百万頭の象」と
いう意味があり、その名の通り、こ
の地には多くの野生の象が生息し
ていました。切り出した木材を運搬
するなど人と共に働く動物である
一方、仏教の教えと結びつきのある
宗教的な存在でもあり、まさに王国
を象徴する動物だったわけではな
く、象を慈しみながら暮らし

を営むのがラオスの人々。し
かし近年、森林伐採や密漁な
どにより国内の象の数が激
減しています。国の象徴たる
象を守ろうと、象の自然保護
区や保護センターを設ける
動きが盛んになりました。保
護区では、森林伐採の制限、



密漁撲滅のバトロール強化などを
実施。また、特に象が多くいる地域
では、社会と象の文化的な結びつき
を思い起こしたいとの趣旨で象祭
り(「象のパレードなど」)の開催も。
ラオス政府は、国際機関、NGOな
どと連携して、象の保護と、保護啓
発活動に取り組んでいます。
自然環境の中にいる象を近くで
観察できる自然保護区や保護セン
ターは、観光スポットとしても大人
気。中には、そこを訪れることによ
り保護プロジェクト支援につなが
る施設もあります。象は、ラオスを
知るための重要なキーワードのひ
とつです。



赤尾和美が【公益財団法人 社会貢献支援財団『奨励賞』】を受賞

公益財団法人 社会貢献支援財団(FESCO)『奨励賞』は、『社会貢献者表彰』の受賞者を対象に、その活動をさらに推進するために贈られる賞です。2021年に受賞した赤尾も対象となり、引き続き奨励賞をいただくことができました。FESCOの安倍昭恵会長がLFHCを視察訪問されたり、ベトナムとカンボジアで開催されたFESCO主催のワークショップに赤尾を招待して下さったりと、賞と同時に貴重な機会もいただき、たいへん嬉しく思っています。

井津建郎が【第19回ヘルシー・ ソサエティ賞ボランティア部門[国際]】 を受賞

井津がずっと口にかけている「アートは世界を変える＝Art Can Make A Difference」という信念や、当団体の「Compassionate Care」という理念を評価していただいたことはとても光栄であり、喜ばしいことです。



© ヘルシー・ソサエティ賞事務局

当団体が【第5回SDGs岩佐賞】を受賞

SDGs岩佐賞は、公益財団法人 岩佐教育文化財団が主催する、SDGs17分野で貢献した個人や団体に与えられる奨励賞です。当団体は「アジアの子どものための優しい病院づくりと現地スタッフの育成」が評価されての受賞となりました。

国連が掲げるSDGsは、地球上で誰一人取り残さないための持続可能な開発目標。貧困、教育、



環境などの17分野のうち、当団体は「3.すべての人に健康と福祉を」「4.質の高い教育をみんなに」「16.平和と公正をすべての人に」「17.パートナーシップで目標を達成しよう」について取り組んでいます。

イベントトピックス

東京マラソン&東京レガシーハーフマラソン

日本最大の都市マラソンである東京マラソン、国立競技場をスタート&フィニッシュ地点とする東京レガシーハーフマラソン、どちらも一般財団法人東京マラソン財団が主催する国際的なマラソン大会です。これらの大会にはそれぞれチャリティ枠が設けられており、その寄付先団体のひとつとして当団体も参加しています。

ラオスの子どもたちに医療を届けることに共感してくれたチャリティランナーが、世界各国から集まってくれたことに感激。ランナーたちの激走にも感激。大会前に催されるEXPOのブースや、マラソン後に立ち寄れる団体特設の休憩ブースで、チャリティランナーのみなさんと交流することもできました。



© 東京マラソン財団

東京チャリティ・ガラディナー

パーティー形式のチャリティーイベント[東京チャリティ・ガラディナー]を開催。184名の方々が国内外からご参加くださり、オークションなどを通して大きなご支援をいただくことができました。

～高円宮久子妃殿下ご臨席～

今回のガラディナーには、高円宮久子妃殿下もご臨席くださいました。ご公務が続くお忙しい中、当団体のイベントにお出ましいただいたことや、妃殿下のお人柄が伺えるとても素敵なご挨拶を頂戴できたことは、たいへん光栄なことでした。ご協力いただいた宮内庁の皆さまにも感謝いたします。



たいへん光栄なことでした。ご協力いただいた宮内庁の皆さまにも感謝いたします。

こんな支援方法もあります

●本やCD/DVDを「ありがとうブック」に送付

家で眠っている本やCD、DVD、ゲームソフトを合わせて30点以上、宅急便で「ありがとうブック」に送ると、その買取代金が当団体に寄付されます。新品・中古は問いません。部屋を片付けて寄付につなげましょう。

問い合わせ先：ありがとうブック

<https://www.39book.jp/supporter/2095/>

●健康ドリンクを購入

「お〜いお茶」などで知られる飲料水メーカー（株）伊藤園様とのタイアップ企画を行っています。

「伊藤園 健康体 契約企業専用サイト」

<https://www.kenkotai.jp/shop/a/abbcT044/>

このサイトでは優待価格で商品を購入でき、また、その売上の7%が当団体に寄付されます。「伊藤園 健康体」は、毎日の健康を積み重ねる良きパートナーとして、健康飲料や健康食品、サプリメントなどを扱っているオンラインショップです。健康増進を図ることが支援につながりますので、ぜひご利用ください。



●イベントを開催

当団体を支援するチャリティイベントの企画・開催を歓迎します。たとえば、ご友人とのランチ会やゴルフコンペの会費に支援金を上乗せする、学園祭やサークルのイベントで募金箱を置く、自分たちでチャリティライブを行うなど。団体紹介の資料等が必要な場合は、お気軽にご相談ください。

●ブランド品を「Brand Pledge」に送付

着なくなった洋服やブランド品をダンボールに詰めて「Brand Pledge」に送ると、査定金額に最大500円を上乗せした金額がフレンズに寄付されます。

クローゼットの中に身に付けなくなったブランド品は眠っていませんか？もう出番はなさそうだけど捨てるには惜しい……と思ったらぜひ、そのブランド品を子どもたちへの支援にあててください。洋服やバッグ、アクセサリーだけでなく、スカーフ、ハンカチ、タオルなども対象となります。買取金額に対しては税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

問い合わせ先：Brand Pledge

<https://brand-pledge.jp/associate/fwabjapan/>

●グラフィックデザインなどの技能や専門知識を提供

チラシやDMのデザインを担当してくださるボランティアを募集しています。他にも、専門的な技能や知識を活かしたボランティアをしてみたい方、どんどんお声がけください。

●携帯料金とまとめて寄付

ソフトバンクのスマートフォン利用者は「つながる募金」を通じ、携帯料金と一緒に寄付ができます。100円からの毎月継続寄付、1回限定の寄付を選択可能。寄付金控除の領収証も発行します。

●遺産・香典を寄付

故人の遺志を、アジアの子どもたちのために役立てていただくことができます。活動地やプロジェクトを指定することも可能。必要な手続きを行うと、税制の優遇措置を受けることができます。

皆さまの支援でこんなことができます

750円	輸血パック1つ分	10,000円	入院治療費(ICU、新生児室、IPD)
1,500円	外来診察代5人分	30,000円	検査科の運営費1日分
3,000円	CTスキャン1回分		

※1ドル＝150円の場合

How to Support 支援方法について

私たちの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

●正会員

年会費 シルバー会員

個人12,000円～

団体・法人30,000円～

ゴールド会員

個人30,000円～

団体・法人50,000円～

プラチナ会員

個人50,000円～

団体・法人100,000円～

(年度ごとに更新・議決権あり・入会申込書あり)

●賛助会員

年会費6,000円(支払月より1年間)

●学生賛助会員

年会費3,000円(支払月より1年間)

●マンスリーサポーター

月500円～自由に金額指定

(クレジットカードまたは指定口座より引き落とし)

●一般寄付(金額・回数自由)

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行しますが、正会員年会費は対象外となりますのでご注意ください。

※PDFでの領収証発行にも対応しています。ご希望の方はお申し付けください。

※銀行振込や、インターネットからのカード決済も可能です。

※寄付金の10%は現地の活動を支えるための管理費として活用させていただきます。

マンスリーサポーターって何？

マンスリーサポーターになると、決まった金額が毎月、ご指定の口座から自動的に引き落とされます。「継続的に支援したい」「小さな金額で無理なくコツコツと支援したい」「年会費の振り込みを忘れがち」といった支援者さんからの声にお応えして誕生しました。500円からの支援プランがあり、好きなプランをお選びいただくことができます。

<お申し込み方法>

■クレジットカード決済をご希望の方

右のQRコードもしくは以下にアクセス

<https://congrant.com/project/fwab/1658/form/step1>

■口座振替をご希望の方

フレンズ事務局までお問い合わせください。



2024年 活動計算書

2024年1月1日～2024年12月31日

特定非営利活動法人 フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

(単位:円)

科 目	金 額
I 経常収益	
1 受取会費	540,000
2 受取寄付金	147,790,603
3 受取助成金等	5,220,000
4 事業収益	8,297,492
5 その他収益	120,521
経常収益計	161,968,616
II 経常費用	
1 事業費	
人件費	7,408,992
その他経費 支払寄付金	131,627,297
その他	18,978,701
事業費計	158,014,990
2 管理費	
人件費	2,357,192
その他経費	2,332,509
管理費計	4,689,701
経常費用計	162,704,691
税引前当期正味財産増減額	(736,075)
法人税、住民税及び事業税	70,000
当期正味財産増減額	(806,075)
前期繰越正味財産額	26,459,780
次期繰越正味財産額	25,653,705

東京チャリティ・ガラディナー2024スポンサー



2024年度役員

代表

赤尾 和美(看護師)

副代表

井津 建郎(写真家)

理事

宗 綾子

(バイン株式会社 執行役員/社長室室長

株式会社シャイン・コーポレーション 社長室室長

三光ソフランホールディングス株式会社 宿泊事業部/

人事マネジャー)

戴 波留美

高橋 大輔

(三光ソフランホールディングス(株)専務取締役

メディカルホットライン(株)代表取締役

(医)誠光会 ひかりクリニック 理事

(福)誠高会 さくらんぼ保育園 理事)

中小路 太志

松島 彰雄(前代表)

山下 徹真((宗)中山身語正宗 責任役員、

妙光山常行寺住職)

監事

熊井 昌広

2024年度正会員

和泉 直子

一乗 朋美

大角 雄三

大松 誠二

(株)岡興産

小川 直美

小澤 誠

加藤 嘉哉

加藤 美里

兼子 思

熊井 貴美

熊井 昌広

(株)熊谷組

小山 達雄

Sisyphus(株)

(医)誠光会 ひかりクリニック

関岡 俊二

(宗)泰宗寺

高橋 俊晴

(株)ナース・ステーション

猶原 祥光

中山身語正宗 関東別院誓照寺

則包 哲

橋本 朋子

平岩 町子

松原 めぐみ

水谷 祐子

メディカルホットライン(株)

(医)めときこどもクリニック

(医)横田小児科医院

いつものイベントがチャリティに!

当団体では、団体主催のイベントとは別に、「あなたのイベントをチャリティにしてみませんか?」というイベント誘致活動を行っています。たとえば、バンド仲間で開催するライブ、友人や仕事仲間と行うゴルフコンペ、会社が主催や協賛をするコンサート・舞台等のエンタメイベント、学園祭などなど。どんな形のものでも気持ち次第でチャリティイベントにすることができますよ、というお誘いです。ポイントをご説明しましょう。

＊まずはそれぞれのイベントを予定通り、通常通りに開催。

例1) チケットや会費の一部をフレンズへのチャリティとする(1000円のチケット代/会費にはフレンズへの100円の寄付が含まれています、といった記載・説明を行う。金額の設定は自由)

例2) イベント会場に募金箱を置く。

これだけで立派なチャリティイベントになります。必要があれば、当団体スタッフが活動紹介に出向く、活動紹介パネルや募金箱の貸し出しをする、イベント広報の一端を担うなど、協力を惜しみません。

最近の実例として

- お笑いライブ：チケット代の一部が当団体への寄付に。当団体では団体紹介のパンフレットをライブ会場で配布。
- 能と現代音楽のコンサート：会場に募金箱を設置。募金をご寄付いただいた。開催当日は当団体スタッフも出向き参加者に向けての広報活動を行ったほか、裏方として主催者をお手伝い。
- バイオリンコンサート：売上の一部をご寄付いただいた。当団体ホームページやSNSでコンサートを告知。
- 高校・大学の学園祭：東南アジアのスタディツアーに参加したグループの報告会会場、ボランティアサークルのブースに当団体の活動紹介パネルと募金箱を貸し出し。募金をご寄付いただいた。難しく考えなくても大丈夫！開催予定のイベントがあれば、ほんの少しアレンジを加えただけで立派なチャリティイベントに変身します。ぜひぜひ、お気軽にお問い合わせください。



【寄付型飲料自販機】を広めよう!

自販機の売り上げの一部が寄付先団体に寄付される【寄付型飲料自販機】の設置を進めています。

【寄付型飲料自販機】でドリンクを買うと、代金の一部が自動的に団体への寄付に。これは(株)伊藤園様とコカ・コーラ ボトラーズジャパン(株)様が社会貢献活動として取り組んでくださっているものです。

学校、職場、パーキングなどなど、【寄付型飲料自販機】を設置してくれる会社やお店を募集しています。もちろん、個人で設置いただくことも可能です。

設置に関する詳細は、お気軽に事務局までお問い合わせください。



● お問い合わせ先：フレンズ事務局 friends@fwab.jp

